

ず、途方に暮れて駅前の学徒援護会に入って事情を話したところ、同志社大の女性の方が、幸い知っていたのことで連れて行っていただきました。立派な門構えの家なので入るのに時間がかかりましたが、意を決して、恐る恐る玄関の戸を開け、声をかけたところ、フライパンを持った弟が出て来て、私を見るなり「あっ、姉さんや、姉さんが帰って来たで」と叫びました。その声を聞いたとたん私はへタリこんでしまいました。

ちょうど一週間前に姉がここに訪ねてきて、手紙を置いていたので家族の消息もわかりました。

両親、次兄家族の六人は留用でいまだ奉天に残り、診療に携わっていました。

召集された長兄は復員して東大の医局に復職している由。姉、三兄は壺蘆島から引き揚げ、姉は水戸の夫の実家へ、三兄は東北大医学部に編入。

祖母、叔母は叔父の実家松本の方へ。それぞれが一人も欠けることなく（我が子だけは欠けてしまいました）が無事日本に帰りついたことは何にもましてうれ

しいことでした。

主人と姉の夫はシベリアで抑留生活を送り、奇しくも主人が入院していた病院で、看護士として働いていた姉の夫に再会。主人は二十三年九月に、両親次兄家族は二十三年三月に、姉の夫は二十五年九月、叔父は二十二年頃に無事日本に戻り、我が家の外地での生活に終止符を打ちました。

わが思い出の地 満州

香川県 那須 佐紀子

私が初めて満州の土を踏んだのは、敗戦三カ月ほど前のことだった。

昭和二十年の四月、歓呼の声に送られて宇高連絡船の高松栈橋を離れ、第八次蘆屯開拓団にいる両親や妹のもとへ、報国農場隊員の人たちと一緒に渡満した。

それまで私は、高松高等女学校四年生として、香川県より兵庫県鳴尾村にある川西航空機株式会社鳴尾製

作所へ、前年の秋から学徒動員で行っていた。

鋼部部品部に配属されて、慣れないハンマー打ちや、鉄板を切断する作業をしていたが、急ぎよ、繰り上げ卒業となり、三月二十七日に薄ら寒い工場の片隅で、昨日と同じ戦闘帽子にモンペ姿で「海ゆかば」を歌って卒業式を終えていた。

昭和十四年三月、父は第八次蘆屯開拓団の本隊員として渡満、当時の国策であった二男・三男対策の時流に乗り、両親を大層喜ばしたそうである。

私が渡満するころ、我が家では四番目の妹がアメリカ赤痢にかかり、死亡し悲嘆に暮れていた。

渡満するまでの父は、高松中学校に勤めていたが非常に筆まめな人だった。その筆まめの父でさえも私に心配をかけまいとして、妹の死を知らせて来なかったが、この繰り上げ卒業のときは母の寂しさが耐えられなかったのだろうか、再度にわたって渡満を促す手紙を送ってきた。

当時、混沌とした情勢に交通機関も乱れていたの
で、果たして満州に着けるかどうか、不安ではあった

が、刻一刻と両親のもとに近づいていると思うと嬉しい思いでいっぱいであった。

朝鮮半島を縦断、はげ山に洗濯女がよく目に付き印象的であった。鴨緑江を渡り、いよいよ満州に入ったころから視野が急に広がった。見はるかす大地が果てなく続く。よく見るとこの沿線の両側には、大豆の山が無造作に転がっている。いや、転ばせているようだった。つい数日前まで私は、その大豆の搾りかすである、豆粕ごはんを鳴尾の工場では食べていたのだと思うと、父の言うとおりの満州は食糧の宝庫の国だとしみじみ思った。

「せきとうー、せきとうー」と、語尾を長く引くようなアクセントのアナウンス、いよいよ私たちの目的地に近い石頭の駅に着いたのだ。これが、父や母からの手紙に度々書いてあった石頭駅か、なんと寂しいところだろう。遠ざかる列車の尾灯が見えなくなるまで目を凝らしたが、視界は真っ暗やみ、おずおすと小さな駅舎の明かりに開き戸を押すと、「ギイーン」と間延びしたような音がして小太りの女が起きてきた。

その話し声を聞きながら、開拓団からはだれも迎えにきていないらしいという不安がつつと脳裏にひらめいた。

「さあ、行くぞー」という引率の先生のひと声で、私たちはリュックサックを背負い直して歩き始めた。ただ黙々と星明かりを頼りにして歩く、五里霧中とはこんなことをいうのだろうかと思いつつ歩き続けた。風は容赦なく私たちに吹きつけてくる。ばり、ばり、ばりと大陸特有の黄砂だ。途中で用便のため小休止をとったが、大粒の砂塵には驚くばかりであった。満州生活の門出の歓迎陣は、人ならず黄砂であった。

後で知ったことだが、報国農場隊員の宿舎までは約十二キロメートルの道のりであった。

なあーがい衣装 布の靴

箆を片手に クーニヤンが

春の若草 摘んでいる

蘆屯小唄で 摘んでいる

ちよちよんが ちよんちよん……

翌朝、本部前でのこの「蘆屯小唄」で、ようやく歓迎の運びとなった。この歌の作詞作曲は、蘆屯在満国民学校長であった濱田義雄先生で、和やかな、ゆつたりとした旋律が満州らしくて、私たちも笑顔で手拍子を取りながら歌い始めた。

当時、横田義則、戸矢崎五夫の両訓導がいたが、相次いでの応召で、私は本部に着いた翌日から手伝いにくてくれと濱田校長に懇願されて、代用教員の見習いとなることになった。遊んでいてはもったいないご時勢、お役に立つならばと軽い気持ちで引き受けて、一・二年生の複式学級を受け持ち、そのうえに高等科の武道として取り入れられていたなぎなたを受け持った。それは私の得意とする科目であったからだ。

今思えば、私の生涯での花の三カ月であった。久しぶりに両親や妹たちと暮らせる毎日で、夢のようであった。内地にいたときのように空襲におびえることもなく、爆音を発する恐怖の影ひとつない平和な家族団らんの日々であった。

何とか、この一学期を無事に終えるころ、校長より

范家屯にある全満女子教員養成所の一カ月講習に参加するように指示された。教員になる、ならないは別として、満州への見聞を広めるには絶好の機会ではないかという父の助言もあって、七月三十一日、両親や妹たちの見送りを受けて蘆屯を後にした。そして二度と再び、この地に戻ることはかなわなかった。

八月二日から始まった講習には、全満州から集合した百余人の先輩たちを見習いながら、楽しく歌ったり、踊ったりした。また、主に錬成場の大豆畑や西瓜畑の土を耕す作業のため、各人がくわを持って汗を流していた。

八月十日ごろの夜からは、新京市方向に照明弾が落とされはじめてソ連軍の侵攻が伝えられたが、内地のようなことではないだろうと、高をくくっていた。当時の情勢ものんびりと受け止め、慌ただしさもなく過ぎていた。

八月十五日正午、ついに私たちの運命を変える日がきた。朝からの重大放送の予告どおりに、作業を早く切り上げて全員で聴いた天皇陛下のお声は、じゅりじゅり

やり、じーじーという雑音ではつきりとは伝わらなかったが、ラジオの前に座っていた人たちの中には、嗚咽とも奇声ともつかぬ泣き声と涙で、前のめりになるように崩れていった人もいた。

その詔勅が終わるや否や、人々が、街々が豹変していった。

たった今の今まで愛想よく昼食の用意をしてくれていた中国人は、既に出来上がっている大鍋の汁や、ご飯や、煮物などを、「日本敗けた！ 日本敗けた！」と騒ぎ立てながら、私たちの面前でひっくり返してしまふ始末で、どうしようもなく、私たちは自分の席に戻り呆然としていた。

家族への電報を打ちに行ったが、日本人ばかりの長い行列、わいわい言いながら料金を払ったが、後で聞いた話によると一通も発信されていなかったそうだ。

お腹が空いてきた。その時、同室の宮城県出身の伊藤ハツミさんが、西瓜を食べに行こうと誘ってくれた。そういえば、午前中まで作業をしていた大豆畑の横には、西瓜玉がごろごろしていた。「さあ、行こ

う！」と走って行ったものの、西瓜玉は一つも見当たらない。まるで狐に生まれたようだった。腰が抜けたようにがっくりと座りこんでしまった。

さすがに伊藤さんだ。新婚だとは言っていたが、しつかりしていた。東北訛がかわいくて、帰国するまでお世話になったが、その伊藤さんが私にお構いなく畑の中をゆっくりと歩きだす。地平線にまで届くような畑をくまなく探し、ついに小さな西瓜を大事そうに抱えてきて、「一つぐらいいは残っているだろうとは思っていた」と言っていた。みてみたら、ぼんぼんというよい音が返ってきた。が、包丁も無いのに……と思っていると、そこは彼女の手際よさ、小石の上にぼんと落とした。見事に二つに割れた西瓜のみずみずしいこと、顔をくつつけながら向かい合って食べた。

これで少し落ち着いた二人は、西瓜畑に腰を下ろして空を眺めながら、いったい、これからどうなるのだろうかと話し合ったが、ノモンハン事件のことになると言葉は続かなかった。するとその時、左の方角から日の丸の付いた戦闘機が、たった一機だったが飛んで

きた。思わず二人は手を振った。「おーい、おーい」と叫びながら、やはり日本は敗けていないぞ、日本はあるんだ、と小躍りして喜んだのもつかの間、やがて右の方角から、その日の丸のマークが汚く塗りつぶされて飛んできた。私たちは、もう一度一生懸命に手を振って機影を追った。

この范家屯は、日露戦争の時のロシア軍の拠点であったらしく、その報復ということか、ソ連軍の進駐は早かった。

やがて日本軍の車で乗り込んできた十人ぐらいのソ連兵が、急ブレーキの音も荒々しく玄関先に現れた。「きたあー」、私たちは息を飲み込むようにして身を隠す。引き戸一枚を隔てただけの近さでお互いに体を寄せ合っていた。早鐘のように打つ胸の鼓動、息の深さまで分かる。

最高責任者の山田教官が、ソ連兵を出迎えて、私たちの宿舎を案内されたが、ドカドカという軍靴の音が、廊下にめり込むほどに響きわたる。重々しい金属音と、不気味な笑いが迫ってくる。「早く行け、早く

去れ」と、息の止まるような思いで念じていた。

すると突然に、オルガンが鳴り始めた。その音律はゆるやかで、そして流れるようだった。しばらくの間、敗者も勝者もなくその音色に浸りながら、同じ空気のの中にいた。

どれほどの時間が流れたものか、緊張のあまり覚えていない。やがてオルガンの音がピタリと止まり、一瞬の静寂が走った。と思つたら、ソ連兵のがい歌が萃がった。そしてピーピーと口笛を鳴らしながら、戸板一枚向こうの廊下を引き揚げて行つた。

胸をなでおろす私たち、何よりも全員が無傷であつたことの喜びに抱き合つたのもつかの間、次の恐怖は、直ちにこの建物を開放せよということと、今きたソ連兵の倍ぐらゐの数の女を出せという要求であつた。

家族との音信は絶たれ、この地を離れなければならぬ不安、それに私にはまだ中国の言葉が分からなかつた。

早速に、私たちは大広間に集められた。今しがたソ

連兵が弾いて行つたオルガンの周りに、大きな輪をつくり、決別の歌を教官それぞれに歌い始めた。なかでも山田教官の歌は、「大和の春」であつた。「今、まさに春風の柳に見えて……」と全員で歌いながら、涙ながらに故国日本をしのんだ。

夜陰に紛れ込みながら、私たちは手をつなぎ、ぬかるんだ道を歩き出した。どう歩いたものかよく分らないが、范家屯神社の境内につながれていた日本の元軍馬らしいいなきには、つい手が離れそうになつたが、気を取り直して歩き続けた。

その夜は、石丸教官の家に泊めていただいたが、教官の家でも、「ここからソ連兵が侵入してきたら、こちらの窓から出て、このように逃げなさい。あちらから侵入したときは、この入口から……」という親切なご指導があつたことも忘れられない。

北満の冬の到来は早い。少しでも早く南下してそれに備える人など、それぞれの考えに基づいて別れ別れに行動することになった。行くあてのない私たちは、須崎教官の勧めで新京市にある在滿教務部へ行くこと

になり、范家屯の駅から貨車に乗り込んだ。が、それも二つほどの駅が過ぎると、もう動かなくなった。南新京の手前からずぶぬれになりながら歩いた。線路伝いに下ばかり見て歩いてしたが、そのうちに規律ある集団の行進に出会い、元日本軍の兵隊かなとよく見ると、ロシア軍の女兵士の一団ではないか、笛を吹きながら大通りを堂々と行進していた。私たち日本人を威嚇していたような態度だった。私たちは黙して見るほかなかった。

この時、児玉公園の入り口の辺りにあった児玉大将の馬上姿の銅像は、何かでけ落とされて、馬の腹部には大きな穴が空き、横倒しにされていた。

関東軍司令部はと見ると、まだ、門衛には日本軍の人らしき人物が立っていたので、私たちは一礼して通ったが、しばらくして振り返ってもう一度見ると、今度はソ連兵がフリーなスタイルで動き回っているのが見えた。

この関東軍司令部の近くにある関東局教務部の残務整理をすることになった。薄暗い部屋で気味が悪く、

だれが潜んでいるかも知れないほどの陰気なところだった。

秩序も乱れてはいたが、仲間と一緒にいるというところの気強さが何よりであった。全満から逃避行して新京に集まって来る先生方に給料などを渡す仕事をしてしたが、東北部の悲惨極まりない情報に一喜一憂しながら、家族の状況を推し量るしか手立てはなかった。

当時、関東局の職員家族は鎮南浦へ疎開をしていて不在だったので、家事の手伝いかたがた、身を守ることで精いっぱい私たちは、やがて総長閣下以下の官舎に二、三人ずつ割り振られて起居することとなった。私は、小池さんというお父さんが軍人だという東京の人と二人で、行政長官の古野利秋さん、その直属の金沢市出身の織田鼎さん、島根県出身の北脇茂さんの官舎で暮らすことになった。

しかし、私は炊事が上手にできるほど水仕事の経験をしていなかった。いろいろな織田さんに教えてもらいながらしていた。織田信長の末裔と名乗るだけあって、いつも鼻の下にひげを蓄えていたが、細かい

ところまでよく気の届く人であった。一方、北脇さんは明るく、愛妻家タイプの人なので、朝起きると今日も家内の夢を見たと言いながら、あごひげをじやりじやりさせて剃っていた。

そうこうしながら、更に教務部命令で使役に出る日も多くなった。この官舎群のいい家には、ソ連軍の将校が入っていたので、その家の掃除やら皿洗いに行くのである。べたべたと脂っこいものを食べるのだが、当時は適当な洗剤もなく難儀をした。

ある将校は、私を「マダム」と呼び止めて足もとを指すので、よく見ると赤い鼻緒の下駄を履いているのを珍しがっていた。私は下駄を、真ん中の指にひっかけて歩いてみせた。「ハラショー、ハラショー」と、手をたたいていた。

しかし、ソ連兵の洗濯の使役にはほとほと困ってしまった。初めは石けんもないのでこちらで間に合わせていたが、大きな風呂があることが分かり、それからはずべて庭で洗うことにしたものの、悪臭がきつくて往生したこともあった。ほとんどの兵隊が、風呂などに

は入らず、エアーのようなもので体に吹きつけるだけだと聞いていた。そのうち日本軍から没収した石けんを持って来るようになったが、家の中まで洗濯物をちやんと干しているかどうかを見に来るのには閉口した。

十月に入ったある日、范家屯から須崎教官が教務部にきた。もうそのころになると関東局の教務部も官舎の方に移っていたので、毎日行かなくてもよくなっていた。私は、直接お会いできなかったが、山田教官の訃報を知らせにきたのだった。それも何者かに撃たれたが、その人物がだれであるかは分からないそうだが、折も折、奥様は臨月を迎えており、その目の前での惨事であったそうだ。

そのショックは、さぞ大きいことだったろう。その後、いかがお過ごしかとずっと案じていたが、七年ほど前に九州の五島列島北端の宇久島にある山田教官の墓前にお参りすることができて、気持ちの上からは一区切りがついて安心した。

その後の様子を聞けば聞くほど、悲劇は悲劇を生ん

でいた。教官の死後、生まれた子供も奥様も、後を追うように亡くなられて、残された二人の遺児が健在でおられ、長男は五十歳になっておられた。「ただ、父の記憶は、ダーンと撃たれたときの弾の音がいまだにこの耳に強く残っているだけです」と、耳をふさがれていた。更に当時一緒におられた山田教官の妹の松田藤子さんが、言葉が続けて、「山田家だけで七人の遺骨を小さい紙箱に入れて抱いて帰りました」と、涙ながらに話された。ご一族の方々と海を臨むホテルで波音を聞きながら、あの「大和の春」を歌って亡き人々をしのんだ。

十月三十日、念願の家族再会の日がきた。牡丹江市に近い蘆屯からの逃避行を続けた父たちの一行は、团长行方不明となったために、ずいぶんと労苦を重ねながら、この新京の難民収容所となった室町在満国民学校にたどり着いてきた。

夕方、そのことを知らせてくれた軍人風の人は、「ご家族、みんな元気できていますよ!」と、にこやかに言っはくれたものの、何故父が来ないのか、そ

んな不安が頭をよぎったが、そう言うより仕方がなかったことがすぐに分かった。

「おとうさん!」と呼びかけると、一瞬目を開けようとすが、うまく開かない。起きようともしないで、ただ半眼開きにて「佐紀子か? きたんか、よかつたなあ、よかつたなあ」と言ってくれたが、母が横から「姉ちゃんが元気で、よかつたなあ!」と、言葉添えて一緒に喜んでくれた。私を捜すために、三カ月近くもかかった。まさに父の執念で、魂でここまできてくれたのだ。冷たい土間に寝かされている父を、何とかしなければいかんと、母と話し合っている間も、こんこんと眠り込んでいる父。いつも元気だった父だけにこれは尋常ではないと思いつつも、まさか死ぬとは考えてもいなかった。

これで父が快方に向かえば怖いものはないとまで力強く思っていた。早速に、関東局の杉原さんが「担架を用意するから、この官舎にお父さんを運ぶように!」と言って手配してくださった。更に、同室の織田さん、北脇さん、古野さんの連名で、お見舞いまで頂戴

した。それも、「那須さんには、いろいろとお世話になってます」との言葉が添えられてあった。本当は、こちらから申さねばならぬ言葉であるが、父も母も、大変に喜んでくれた。「国は滅びても、人情は滅びず」のとおりだった。

その夜の冷え込みは厳しく、父の足をもみながら二重、三重に靴下を履かせても少しもぬくもりが戻らず、いくらさすついてもついに目を開けてはくれず、「ありがとう、ありがとう」を繰り返すばかりだった。

寒気と飢えのもとに、全満から集まってくる日本人難民、生きるか、死ぬかのぎりぎりの人間が背中合わせにうごめいている学校で、父はとうとう最期を迎えるに至った。

翌日、まだ温もりの残っている父は、死者たちが並んでいる教室に運ばれた。だれがしつらえたのか、お香の香りが漂っている。ろうそくもともされていた。多い日には、一日でこの教室が死者でいっぱいになるそうだ。

父のなきがらは入り口に近いところに並べられた

が、安らかな眠りでまだにこやかさが残っていた。

教室の隅には、一際大きい軍服姿の人の遺体が目立っていた。どこかの部隊長さんだったとかで、昨日、運ばれてきたが、もうお腹が膨れあがつて恐ろしげだった。だが、立派な軍服に革靴を履いていた。

「私たちが何となく静まり返った教室で、「ああ！こまできてしまったのか」という無念さと、空虚感におそわれていた。

「コロッ」と冷たい音が床に当たる。「あつ、何の音かな？」と思ったとき、狂乱というにも似た女の悲鳴が教室いっぱいにこだました。髪の毛は逆立ち、血の気のない顔をした女の人が子供を背負ってきて、床に転がったときにあの音がしたのであった。こちこちの小さな細い手が、まだ宙を描いている。やっぱりこの子も死んでいたのか。母親は、死んだ我が子を幾日も背負い続けて、やっとここまでたどり着いたのだろう。五歳で死んだ妹を思い出した。幼い者ほど不びんさが募る。

翌朝、雪の降る中を馬車に次々と遺体が積み込まれ

ていく。神戸の空襲のときのような枕木状態ではないが、死者を覆う一枚の毛布もない、ただ雪の白布がせめてものベールとなり、静かに大房身へ運ばれて行った。

それから後、母や、妹たちが次々と床に伏せてしまった。小さい妹が少しよくなったと思ったら、二番目の妹が悪くなり、それが十日ぐらいで少し元気になったかと思う間もなく、今度は、母が肺炎をおこして寝込んでしまった。

そのころも関東局の南さんや、范家屯以来の伊藤さんから、スープができたから、お肉を煮てきたからといってよく差し入れをして頂いた。が、十二月に入って今度は、私が発熱してしまった。高熱が続きうわごとばかり言つて、妹たちも怖がるほどだったらしく、母がどこからか、医者を呼んできた。どうも脳膜炎らしいということ、医者に「このまま熱が下がっても、元どおりにはないかもしれないから、好きな物を食べさせてあげなさい」と、言われたそうだ。それからしばらくして、元気になった妹が、ダイヤ

街に出て行商を始めた。新聞や、ねじり菓子や、パン類を机の引き出しに入れて、ひもを首に引っかけて、ちょうど駅弁売りのようなかっこうで売り歩いたそうだ。仕入れには母がついて行き、売り声を高くして売るほど、通りがかりの人は寄ってくれて売れたそうだ。下の妹はことのほか声がよく通るので、私も声を聞いただけで、「ああ！ やつている、やつている」と思い、かげながら安心していた。

ある日のこと、冷たい凍ったりんごを一つ、姉さんへと買ってきてくれた。赤いりんごをほったにつけると気持ちがいい。その香りに誘われて一口かじる。シャーベット状なのでおいしい。また一口かじる。おいしい！ そばで母も見ていた。妹二人もにこにこしていて私も嬉しかった。

それからの私は、少しずつ元気になって熱も下がってきて楽になってきた。

そんな夜中にジープが止まった。ソ連兵だとすぐに分かったが逃げようにも逃げようがない。しきりに、「アイコさん、アイコさん」と呼んでいる。私を、斉

田愛子さんと間違えて連れにきたらしい。こんなときは共同生活はありがたい。一番奥にいる天理教の五十嵐のおばさんが出てきてくれて、「この人は愛子さんとは違うよ」と、身振り手振りで演技をしてくださった。おかげで額に触れられただけで帰って行った。

当時、関東局に出入りをしていたオペラ歌手の斉田愛子さんと間違われて、大変な夜ではあったが、高熱が身の危険を救ってくれたことになり、今となっては笑いぐさの一つになっている。

そのご縁で、引揚げのときには愛子さんと同じ夏用の軍服をもらって着て、博多に上陸するまでご一緒させていただいた。私の好きな「あわて床屋」の歌をおねだりすると、すぐに歌ってくださいるほど気さくな方だった。帰国してラジオから流れてくる「陽気な喫茶店」の番組で、古川緑波さんたちと出演されていたが、早くに亡くなられたことを風の便りで知った。惜しい方だったが、いい思い出を残していただいたことに感謝している。

敗戦の年も明けて、何とか家族四人が元気に新年を

迎えることができ、私も官舎の方に戻って働いていたが、二月に入り急に周りで何かしら慌ただしい空気が走るようになり、無気味な日々が続くようになった。それは密告だった。人が人を信じられないのだ。

あちらこちらで戦犯として、何らかの理由をでっちあげられて関東局の職員の方々が連行されていく。夕べには総長閣下、次はだれ？と、日本人が日本人を売っていく。当たり前の顔をした人間が、平然として日中はその家に出入りをしていて、つい誘導尋問にひっかかる。蜘蛛の糸にかかった蝶のようなものだと後で分かる。それは、一回目の拘留は短く十日そこそこで、家族には「もう帰れますから」と親切に言ってくれるので、つい安心する。本当にその日を言い当てたように帰してくれる。そこで人間の心の緊張が緩み、そしてついに余計な言葉が出る。もうそのときはすでに遅く、彼らの思うつぼとなる。

その例が行政長官の古野さんだった。九州男児をいつも誇りとして、「早稲田の歌」を歌ってくれた。そしてまき割りもよく手伝ってもらった。その人が今、

苦しんでいることも知らずに、私たち女性は、その夜も夕食を終えて繕い物や編み物に精出して働いていたが、どうも落ち着かない。これも後で気がついたことだが、人に言われてみるとそうだったかと納得できるのである。

その日の宵から、官舎のあちらこちらで赤い火を見たという、それがその人たちの官舎を取り巻いているぞ、という仲間への合図だったのだ。

満州の昼は短く夜は長いので、宵の食事は二食が普通で比較的早い時間なので、古野さんも出掛けていた。十時ごろになり、にわかには玄関辺りから、どんどん戸が壊れるような大きな音がしていたが、やがて、「古野を出せ！ 古野を出せ！」と叫び始めた。

「うわー！ 今ごろどうしたことなの？」と、思う間もなく簡単に玄関の戸が壊されて、軍靴のままですどしどしと入ってきたのはソ連兵数人、頑丈に板を張っていたはずの玄関が、もちろんもめちやめちやに打ち破られてしまった。

相変わらず、「古野を出せ！」と連呼しているばか

りなので、織田さんが、「ニエット」と言ったが通じていない。私は夢中になってスチーム管をたたき続けた。それから家の中を歩き回って物色を始めた。古野さんが危険を察知するようになおも激しくスチーム管をたたいた。

そのうちに、北脇さんも織田さんも、ソ連兵の監視の下に置かれてしまい、動き回れなくなった。それからどのくらいの時間がたっただろうか。居座ってしまったソ連兵は、目をぎよろつかせながら、古野さんがいないことに苛立って、靴やら、マンドリン銃などがちやがちやさせていた。こちらも早く引き上げてくれるとよいのにも思いながら、これはただ事ではすまんぞと、自分で自分に言い聞かすように、時の過ぎるのを待つばかりだった。

そこに、古野さんがにこやかな顔をして帰ってきたので私はがっくりとした。織田さんが立ち上がって古野さんの方に寄ろうとすると、すぐに制止された。

「マダム、あなただけがしなさい……」と、ソ連兵が言った。それは私のことだった。結局、身支度は、私

だけが手伝いなさいということなので驚いた。古野さんの身の回りは織田さんが手伝っていたので、慌てていたこともあり、十分なことではできなかったが、当時、男の方が使っていたふんどしを縫っていたので、とっさにお渡しすることができたことが、せめてもの恩返しとなった。

直ちに、男性のみ三人は拉致され、ソ連兵は官舎を後にした。

無惨にぶち壊された戸板、ガラス片が散乱し、冷たい土間に、青い星の光を受けて光っていた。私は、ただぼう然として離れて行く黒い影を追い、見えなくなるまで見送っていた。大きな影と、軍靴のすれる音と、時々キラリと光るサーベルに無情を感じて立っていた。近くの人の声にわれに返った私は、部屋に戻ったがなかなか寝つかれなかった。

凍土に軍靴の音が引きずられているようで、今になってもこのときの情景は忘れられない。如月の星を仰ぐとき、決まって思い出してしまふ。

その後、織田さん、北脇さんは帰されたが、拷問を

全身に受けて、その痛みはしばらく続いたそうだった。

古野さんの拷問は更に続けられたらしいと、差し入れに行った織田さん、北脇さんが話してくれた。「古野さんが、那須さんの縫ってくれたふんどし、大変に助かったと喜んでおられた」ということを聞いて、本当によかったと思った。女性はこうした関係の場に近づけてくれない。もちろん、面会も許されずに、ただ無事を祈るだけだった。

その拷問の際は、裸にされて革のむちで「ピシッ、ピシッ」とやられ、殊に臀部がひどく、力むと同時に血とふんが自然に出てしまうそうだった。何とひどいことだろう。

私はその話を聞いて、鳴尾の工場の一角でこのような情景を、垣間見ていたことを思い出した。薄暗い裸電球の下で、金網が張りめぐらされた中に白い服装の海軍さんを見た。更に凝視すると、数人の若い兵隊が、後ろ向きで両腕を万歳をするかっこうにされて、臀部をこん棒でたたかれていた。そうすると五体が前にのめって動くので、また兵隊は元の位置に戻りその

お仕置きを受けていた。

その情景と、古野さんのことが重なって頭の中に浮かんできて悲しい思いをした。

わが拉致されし夜のごと星青し

旧満州にわれ若かりき

いよいよ引揚げが始まるぞという声は、夏ごろだったと思う。とにかく、私たちのいるところは、比較的に治安が安定しているというところで後回しとなり、当時、一人千円しか日本に持って帰れないというときに、一人千円ずつ集められて、無蓋貨車の柱とか、テナントなどの購入に当てられた。

出発の日取りも二転、三転して、これで本当に日本まで帰れるのだろうかと不安を抱きながらも、南新京まで歩かなければならなかった。途中で母が腹痛を起こし、どうなるのかとずいぶん心配したが、幸いに大事に至らず無事に帰国に向かっていった。

錦州經由で壺蘆島に行き、そこから博多港に九月十

三日に上陸した。

途中、何度も襲撃を受けて列車は止まった。その都度、お金や女性を出して逃れたが、団長さん方は大変な苦勞があったと伝え聞く。私は、小隊の連絡員として、病人や産気付いた人などの手伝いをしていった。亡くなった人はいなかったのでやれやれということだった。引揚船で博多港に向かう途中で駆逐艦での水葬を目の当たりにしたとき、なぜか二葉亭四迷を思い出していた。

博多港では検疫などのためか、三日ぐらいは入れずに沖合いで停泊していたが、明日はいよいよ上陸だという晩には、甲板でお別れのパーティーということ、サツマイモのつるのみが入ったお粥がふるまわれ、舞台では船員さんが、歌を歌って私たちを慰めてくれた。今日本で一番流行している歌は、「りんごの歌」だと紹介された。

今になって考えてみると、なぜあの時、あんなにも故郷に帰ることを急いだのかと思う。もう少し丁寧な、みんなにお礼の挨拶をすべきだったと反省してい

る。もう悔やんでも遅いところだが……。

どれほどの人が、「おー、帰ってくるのを待っていたよ」と言ってお迎えられたであろうか。帰国して十日もしないうちに「お前は、お父さんもおらんことやし、お母さんの方に行け」と、父の弟たちに言われた。本家に預けてあった父の本箱などを返してもらった。つもりが返されないまま、母方で世話になることになった。

母は針仕事や、日雇い労働者などをして働いた。私は、幸いにも知人が次々と仕事の話を持ってきてくれた。

給料は少々安くても、遅配、欠配のないところを条件にして職を探し、地元の百十四銀行本店に就職することに決めた。給料は安くても遅配欠配のないという二条件は、島根に帰られた北脇さんから満州時代に言われた忠告であった。

東京の外務省内にあった関東局残務整理事務所からも再度にわたり再就職の調査があったが、私一人であれば東京に行きたいところだったが、妹はまだ学校だ

ったし、母を置いても行けず、三年ほど待ってくれたが断念した。昭和二十七年六月には、国庫送金で退職手当など少々だが送られてきた。

三十四年余り銀行に勤めたが、定年前に退職し平成四年七月に長年の念願であった墓参のため、旧満州へ妹と一緒に訪ねた。

逃避行中の山中での襲撃で、一番下の妹の遺骨を手離したことで母の嘆きにも応えたく、父の鉛筆書きの手帳のコースをたどりながら、十二日間だったが歩いて故人をしのんだ。

父といもうとの遺骨となさん蘆家屯の

小石をふたつ袂に入れる

あの時代の先駆者であるかのようにたたえられた国策遂行者。その開拓者たちの死のねぎらいの跡は、行けども行けども黄土色の風ばかりだった。

幾万という死者が埋められた長春市街の大房身は、飛行場と、一面の緑の森となっていた。場所を選ん

で、父の好物だった日本酒を大地に注ぎ、母の遺影を置く。そして涙ながらに、父と同じような運命をたどった御霊に精いっぱいの讚美歌を捧げた。

墓標一本建てることもできない私たちの力なき。こんな後ろ髪を引かれる思いで機上の人となり、あれから月日は流れて行った。それでも、まだ国の墓標が建てられる夢を抱きつづけている旅人である。

満州から新中国での青春

広島県 和田 欣二

まえがき

過酷な体験の記憶も、年月と共に薄れていくが、終戦直後の満州で、狂乱の辺境の地よりの逃避行で、多くの人々が命を落とされ家族離散の末に残留孤児や、残留婦人などとしての戦後がいまだに残され、多くの体験記録も書かれている。

そのほかに、中国に抑留され数年を経て帰国した人

たちも、人命を失う危機的な状況は回避されてはいるものの、行動や言論の自由を束縛されて、望郷の思いに涙した体験は忘れ難いものである。

私も戦後八年を経て帰国できたが、この体験をこのまま忘れ去ることはいかにも悔しく、記録として書き残しておきたい気持ちにかられて、五十数年余り前の記憶を、たどりたどりして書き始めた。

新天地、満州へ

昭和十六年春、父の再婚と同時に新しい母と妹を含め親子四人で、父の勤務地の満州に渡り北満の哈爾濱に着いたが、春とはいえ日本に比べあまりの寒さに震えあがったのが第一印象で、果てしなく続く荒野にはいい知れぬ寂しさを感じたものだった。

父は、一般軍属として現地の軍関係に勤務していたが二年ほどで退職し、現在の藩陽より少し南下した南芬(図1)という小さな町の鉄鉱石を産出している会社にて、友人の誘いで転職した。

ここには四、五百人の日本人家族がいて、小さいながら国民小学校もあり、生徒数も百人余りいたように